國朝年代記

全

特別
り5
7971

門外
7971

萬國渡海年代記

五守堂藏板

北海道立図書館

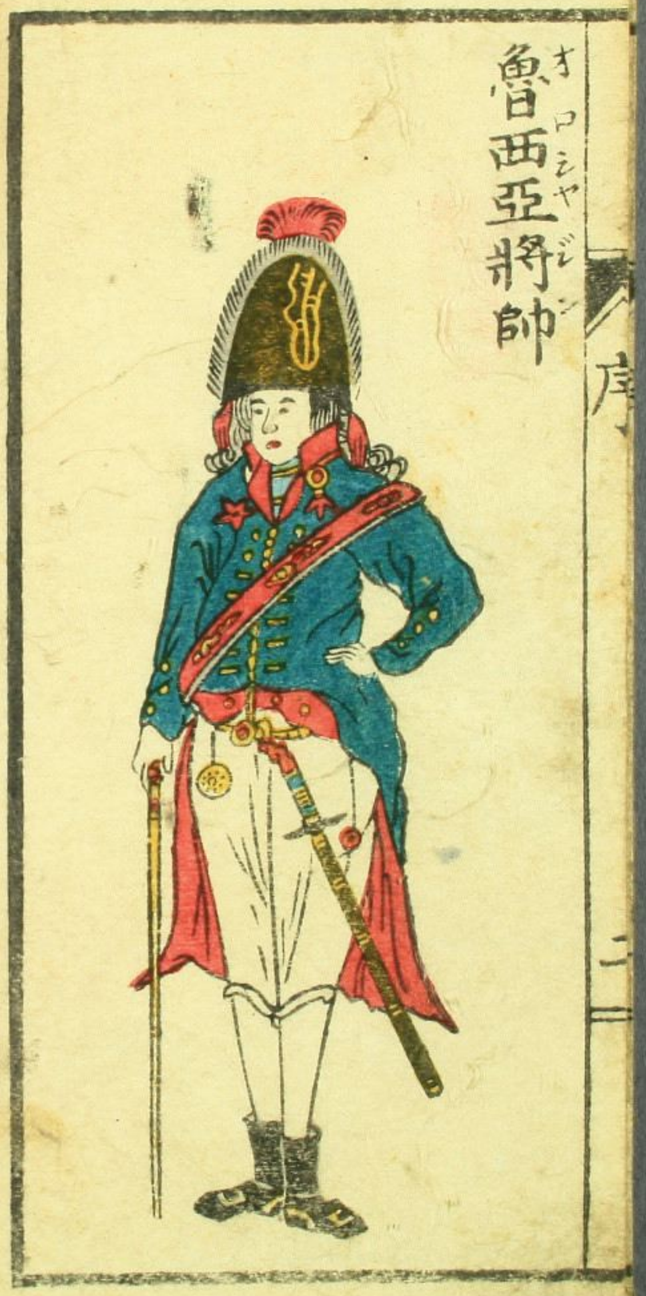
序

國國タル世界茫々トシテ計ルベカラズ。天天ノ覆フ所地載ル所コロ。國ナラザルハナシ。就中日本ハ小國ナリト雖。聖賢ノ教アキラカニ。五常ノ道立テ。五穀豊熟メ四海波静ニ。昇平茲ニ三百年。樂事ノ極トスベシ。サレバ今古諸蕃ヨリ交接スル事物ヲ挙テ渡海年代記ト命ク午睡ノ枕ニ更テ可ナリトセン歟

華律外史識

船入津

長崎唐



魯西亞將帥

萬国渡海年代記

後嵯峨天皇の御代八十九代亀山院四丁卯禪宗南浦紹明宋より後網を
後嵯峨に授る天皇の小枕を宗網とせめ平げ国号
を大元と称し使者を高麗国へつかはし高麗を攻て降
書籍を送り蒙古へ貢物を熟ぜ むべきよう文中とゝのへとも高麗
王日本へ乃至くして変じがたく こゝろの元使をくゝ帰る同文
武辰蒙古王の書籍大宰府へ送る 世世の書籍 聖
あり こゝ逆籍をつゝしまざる同六己巳十一月蒙古こゝの使を高麗の

紀ふ家の財をあつめ、次郎泉次郎とつかはして捕て陸奥一日ヶ
のゆを焼とひはをあつて後を同七庚午蒙古の使者趙良弼
らいこうの船を同八辛未九月蒙古の使者を
家武家ふなをまるとおもはせふ返答の及ばざる
使者を以次第を流て送らる同十癸酉再び来朝し京鎌くらふ
つまづ大宰府よりおひ帰さる九十代後宇多院文永十一甲戌
蒙古のおごん二人大船二百艘小船二百そうあつて襲
来る見まで敕国使者を帰くいんぐも日ヶ終ふ返答ふ及ばざる

るゆを聞りてあり出でく船を防げんさめふ朝廷より諸社ふ祈
を蒙さるまた武家ふ命ぜふ下知して武士をまうく同十月蒙古討
るふ者ふ来り合戦ふおよぶ蒙古利を失ひ滅へん所くふ礼防
して帰こてし

建治 元乙亥二月蒙古の使杜世忠来朝せらるふ
人も来る大宰府ふて見を改め海中ふ入まづ強くふ者ハし
返答ふ及ばず杜世忠等ふ人終の日において首を刎同二丙子蒙
古の使長門のふふ船くふ入りてこまを教さる

弘安 二
己卯年蒙古ふ大元の成祖皇帝宋朝を滅し一統ふ帰祖元

東朝を勇気ちの屍山血なり同日辛巳蒙古國祖宗帝日本
を杜世忠を殺せ一ことを憤り松浦党壱岐党万人の大軍を以て
攻人と云同二月蒙古の阿剌罕范文虎忻都洪茶丘の人十
万人をそつ一船六百艘に乗り日本に渡る阿剌罕途次より
病を同七月兵船ことごとく日本平垂海に入る又彩山に移る
時に筑紫の兵等防船をまうけて待つ同八月朔日大風吹来て
蒙古の兵せん差く破損して彼方知るべき残兵又彩山の下に
留り臍肌に及ぶ諸兵等ますます張百戸とゆ名を大将として兵船を

ふたたび造りて戰ひんとせる事に同月七日日本勢一ぜんび戰て大に
うちて二万人を八角海に殺せ沖に手負人を青島第五二人を
殺し陣に残せし也是日本の兵の強大なるを海ゆ人ゆ驚きおそれ
此時蒙古の性質軟弱なる熟練に乏しく船を接せ員時なり今度蒙古
紅波のおそれ神風のいさぎ所いよ〳〵神威を発せ〳〵をんがゆ
伊勢の国風の社を風の文と云宮号せ〳〵る同七甲申大元の役王積
翁という者伝聞如智という人の日本に来りて国の風ぞくを問ん
とし王積翁船中にて殺さる同松の者再びそ〳〵し

十二代後伏見院元已丑大元の後禪僧一山寧一宋朝ヨリ来
玉を何んと云小象を作こまとを初りて一山と伴豆玉ホ流飛せ
む 元亨 九十八代後醍醐天皇元辛酉大元の禪僧は極楚俊宋
朝より天皇ホ洛渭の陽おを奏し生る事南禅寺ホ居 嘉暦
二丁卯正月大元の後禪僧法拙正法宋朝より南禅寺ホ居 貞治
九十九代後光厳院丙寅九月元孫人宋朝より月ホの紙せん
禅都をそこをうつ 応安 己亥南朝の今天西紫宸殿を
天皇ホ云ふ自ら日本王と称ス時ホ大明の大祖皇帝洪武

年中ホ日本ホ大明の後醍醐ホ敵ホ対ホ
とぶまつて京都ホ出ることを以ぶ
一百代後圓融院応安六癸丑八月大明の後禅僧仲猷西ホ
入洛し嵯峨ホ寓居ス元の都ホ
及ぶとのべ西の京ホ
あるべず義満ホ天ホ謁き同九月表状を奉ること
朝鮮王の使鄭夢周来朝九月の擬郡今川入道了俊人元
倭ホ対ホ日本ホ朝鮮ホ属ス百済の一韓を合て朝鮮王と号ス 康暦

二庚申日本の僧如蘭大明より渡る所の朝の大臣胡惟庸といふ者
明帝と戦せんことをすゝる僧如蘭ふ教こゝて日本より加勢を
を招き進ん事をすゝる事あるべきを胡惟庸八教さるに如蘭ハ流罪
とあり是より海上ハ番船をおきて漫ずる日本船を入ることを
あらさるべし 明徳 百一代後小松院之世申朝鮮使来朝郭好文
義満公許賀をさゝげる 応永 己丑八月使を上人ふ日本へ八使
同又代宮八月朝鮮の使朴敦之来朝を方丈接伴大内左京大夫
義弘接伴とまを方丈義満公書を送らる同八辛巳義満公書

を送らる同八辛巳義満公書を大明帝に送らる且又美今ふ
ふ朴敦之を義満公法律を道義と号ふ同九壬午二月
大明の建文皇帝書状を義満公ふ日本国王源
義満と称せらる文ありと云く同十癸未八月之日相国之浦へ唐船
漂流ふ永樂帝方渡法宮寺実来通用ふ同十一甲申又月大明の
使来朝義満公北山の殿へ渡ふ同十三丙辰春天下 応仁 応永
義満の海賊渡て大明の寧波をとむ大明より義満公ふ是を
告く則法中の族を捕へ誅せらる明帝より公方伝物を送る

送りてあるを附き同十二月大内義弘より遣はす同十二月大
内義弘より義滿公の遺骸を帰ふる事を謝す
及義嗣の書を貢ぐ同廿六日己亥七月使臣渭来朝又陽和
来る 永享 一百二代後花園院元号永享元年戊申
日本国王使と大内義弘より使聘せしむ朝鮮使来朝同又癸丑
六月大内の貢宗白壬寅と義弘より書を同六月宋
朝来る 嘉吉 元辛酉逆臣赤松満祐の助朝鮮へ逃行同二壬戌
源義持公より紀伊同二癸亥又月朝鮮使来朝入洛せり

富山入洛延年新渡の世渡を命じて雑用を下行せしむ同六月
室町の御所炎上して将軍を新渡に 文安 又戊辰八月赤蛮
方より助成朝鮮のことあらんを強せしむる 宝徳 二庚午来七月
琉球人来朝 享正 二丙子将軍義政公より朝鮮王へ書を
享正 元庚辰朝鮮人来朝せり 文明 一百四代後土御門院六甲申
九月義政公より書を朝鮮王へ送り大明勘合の印を求む同七月
義政公より使を以て大明へ送り 永正 八己未又月朝鮮
義澄公一切経の板を朝鮮へ求らる印本を送り板をつくらせ

大水　百又代後柏原院二癸未愛宕細川入乱常桓者船を大内氏へ
多乞ひ渡し人家を焼き郷を亡ぼす仕と云ひ用防の大内義興も又者船を渡
さと宗設と云ふ者を仕と云ひ宗設府と云ふ者を乱る事の
大内氏不得已とて渡を遣はし渡と争ふ事ども度々不
絶いまつて出ん不得已とて宗設大内おいて宗設大内無ゆえ法堂を幸
ひて大内を攻殺し寧波府を殺大内氏より日本の海賊年く
寧波を迎ひ寄せ来る家来ふたいの人多り日本不返済し細
川如不者寓し且ゆゑん不得已　寧録　三辰宗考浮の寧府内不

始て遣船来り大友宗麟不筑紫二接を教ひ　天文　百六代後奈良院
十年丑七月唐船一そう西ノ浦不着岸を出迎二百八十
人と云く同十二癸卯八月唐船一そう長崎同月大隅国
種子島不着船一そう長崎同十二甲辰大隅国種の浦不着船長崎同十
丙午九月後奈良院伯濃不唐船一そう長崎同十六丁未二月大内氏
遣貢の船を大明不差ハ渡す義満公の時より大内氏代
ゑの用ひ勘合の印を船ゆ大明更船のことを乞ひ同十七戊甲
渡のとが靖廿七年畠山式部大輔徐偽昌虎を舞不差ハ同十八己酉

を後世に残す浦ゝに異船見えを後世に残す村横瀬うら後田
うら平戸浦ゝも異船見えを後世に同廿辛亥防長大ゝ乱る九月朝倉右
衛門尉隆景陶晴賢ゝ戦ゝ山口の城焼失上洛世間異
人大ゝ洛ゝ渡る勅命の印焼失して渡ることを元亨年号後ゝ
異船見えを後世に大友宗麟ゝ大友宗麟ゝ大内義隆ゝ
渡り秘法を伝む 弘治 二丙辰七月大内の仕郷鄭功ゝ長ゝ
ゝ書を宗祐ゝ書を十一統宗の滅絶ゝ犯をことを称ふ 永禄
百七代正親町院元亀年唐船一ゝ肥後長崎ゝ長ゝ渡ゝ

上洛ゝ渡ゝ丙午長崎ゝ長崎ゝ長ゝ渡ゝ殺ゝ逐ゝ院大村
理ゝ院ゝ同十丁卯加里用陀船一ゝ長ゝ長ゝ同十二
戊辰異船戸町ゝ長ゝ 元亀 元庚午南蛮船長崎ゝ
めて長崎同二辛未再び来る 天正 元癸酉南蛮人彩宗門を進
長崎ゝ切支丹ゝ建立ゝ云ゝ同二甲戌ゝ長崎ゝ南蛮
の異人ゝ石ゝ沖及安土の楽ゝ来る京都ゝ防門ゝ南蛮
ゝ建同二乙亥唐船ゝ後白杵浦ゝ長崎ゝ虎ゝ丸象一ひきゝ
香鹿ゝ孔雀ゝ外ゝ渡る同ゝ丙子南蛮船ゝ好ゝ長ゝ

唐船漂着之人帰国同七己卯年琉球
人入貢之百八代後陽成院天正十八庚寅年七月朝鮮人来貢し
大閤秀吉公朝鮮同十九辛卯年秀吉公朝鮮へ渡せんと
して先琉球を琉球へ送る琉球より大明へ告て返答ハ
も及ぶ朝鮮よりも急を大明へ告て援兵をこゝ
大閤まゐ朝鮮へ渡して大閤を伐んと渡る 文禄 元壬辰二月
廿六日秀吉公朝鮮征伐のため京都を発し同四月長門の国府へ
着る和泉の国堺を後陣と渡る九人数四十八万人内海陸の

二陣と分け先立て渡海せ〳〵む張り十六万人小西行長を始へ
奏人朝鮮王城へ攻入て逃れ加藤清正ハ北道へ
攻入て朝鮮悉く渡海し国六月秀吉公又大閤より朝鮮
を援ハんとて軍士を大勢人渡海せ〳〵む大閤の命ようり
朝鮮をまくひとつして落る兵を振の安宅船とゆへ所へ日本
勢と戦ひ朝鮮を大閤より大軍をとゝ〳〵朝鮮をとらへ
且又流賊数とゆへの不逆沙長とお張〳〵日本大閤和ぐくのこと
を約を同二癸巳春大閤の名護屋の城へ会戦日本勝大

結ぶ所の兵士悉く撤帰す同月日本大將秀吉薨ず大將後三人
及朝鮮を起すの勿論無張張おいて秀吉薨ずと雖ども猶ほ
承内義弘孫を如安をして送ること一年む且又朝鮮の二王子を
入り朝せんを薄の法なる表く強朝せむ同じ来朝の耶蘇の教
法をきんじ

元丙申八月大明正使副使二人朝鮮二人来朝を
立月二日京城に見奏して秀吉薨ずと報ずと雖ども猶ほ
ふたたび朝せんと使人と俗況同二丁酉二月秀吉又朝せんを使つ元
波浦の七十二万余人大明より文禄年より朝鮮をこぞりて救国の

令義弘日本軍勝利を以て同二年戊八月十八日秀吉薨ず
よりおいて朝鮮を陸の法なるとなりむ同六年壬申豊臣海外征入貢
豊臣氏此せんとすれども安南東埔寨暹羅呂宋入貢同九甲辰至八月
朝鮮の法なる松雲孫文未詳して法府に府を来す
大神君へ親信し奉り朝せんを使の表を中人日ず不同意をして
法安を使つ同十七己未年豊臣秀吉病死朝鮮
二使来朝同月廿日記府を来す同十二丁未朝鮮
名徳を報ずる六月廿日遊府を

大神君ハ薩摩ノ藩ノ同十二年申十二月ハンチヤアを貢同十四年薩摩
後藤清家ハ琉球ヲ伐人ヲ殺ス琉球ヲ伐人ヲ殺ス
百余ヲ殺ス者ハ会稽ノ絵ハ清清利ヲ以テ琉球ヲ攻ル薩摩ノ藩ノ同
琉球ヲ攻ル薩摩ノ藩ノ家ハ清ノ強ノ清ノ進ルヲ
大神君ヲ琉球ヲ清ノ藩ノ同年上総ノ地ハ薩摩ノ
今年ヲ寛永十一年ヲ中ノ印ノ船ヲ清ノ人ヲ不免
ありて外ヲ清ノ清ノ同年阿蘭陀波羅多仏国人貢廣
清ノ同十二月阿蘭港船入津清ノ同十五年成八月清ノ家ハ

やうきうの中山王尚寧ヲ勢ヲ以て薩摩ヲ
大神君ヲ琉球ヲ清ノ家ハ清ノ同廿八日ノ藩ノ
台湾ヲ琉球ヲ清ノ同年八月琉球人薩摩ヲ清ノ同九月二日ノ府
中ノ清ノ同九月安南ヲ入貢薩摩ノ清ノ同十六日ノ清
須賀ヲ琉球ヲ清ノ同ノ人田中ノ素性ノ清ノ同七月十日
南蛮ノ舟ヲ阿蘭港船入津長崎ノ清ノ琉球ヲ
より聘使来ル同十七年ノ大ノ人一度葉ヲ付ケ新渡新把係
亜ヲ貢同十八年五月ノ八月廿六月渡ヲ来ル琉球ヲ

同十九甲寅東浦峯より虎の子二疋獻ぜ秋沢同年南蛮人
和尤人来れりとの門ヤンヤウス不揚ありアンジン
不揚ありしに安平町より八千クワン不揚ありしに八度町と云く 元和
百九代後水尾院二丙辰朝鮮三使来朝八月伊藤利源文証
新本 御朱印をあらため長崎奉行に命じ浦々を見廻り制
法を定む長崎に奉行支丹奉行正の旨 御黒印を以ておこなはる
同三丁巳八月廿一日朝鮮伝使来聘同七辛酉八月長崎にて貢
同九癸未同貢返礼を送いさうる 寛永 元甲子伊勢松阿亜墨貢の

十一

ムネ天竺の法ふうつて手に役を押領せ十二月十二月朝鮮三使来朝同二
乙丑卯にて術相力に長崎にうつみて南蛮をうることを禁ぜ同江丁卯
階仏法に貢同十一甲戌同七月琉球人を二条に於て鹿苑長崎
ゆえ南蛮人他腐として出海をきづく唐船の人源をとうに極め他
国に出来ることを制禁ぜ丙十代後正院同十二丙子月平戸に来る
海法をうつことを止せうる朝鮮人来朝元和に伝て日光山さん
その先祥同十六己卯南蛮人来ることをかさく伝止せうる同十七
庚辰阿蘭陀うの役者私と法アと南蛮人七十匹人入港せうるものと

十二

あくまでも仕近せくる国二十癸未天月流おゐ柳生岩へ者
宗人又人源ふ兵ゑ国義ゑ長清清まゐ〳〵出張ふあるゑ賓えい
年中選ゑ殺ゑふ日本町とつまちありて日本ようまあ者ゑきてゑる
ゑの八出処ふ役所を設ふ後河ゑの者ふ山田仁左衛とつふ者あり
文武の乃ふ西ド国王の兵ゑとあり〳〵後く戦ひをあるまし終ふ
一国のうちとあり〳〵名陣ごてまでふるひしぶ後衰へて滅亡をこの
せう様ようまちさごの船ゑ徒ゑ清とつふゑの山田うちの城下あて
日本の出到あて改〳〵ゑく今其居をとる天竺徒ゑ清とふゑ

此りのことあり又武時ふ後河ゑの者人も仁左衛ふあひて故ひのこと
あてあつうさのまゝ毒神〳〵家とあげ白まとゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵家
天保年中まゝあり〳〵ぶ焼失して今ふ同年中日本新
見こゑく西船の長所好港ふ所の紫陀城新ゑ後ふまりて後く礼拝ふ
及〳〵ゑ長崎ゑ清国ふ清ゑ清同者小左衛ふ男彩義とふゑの
武処〳〵後海〳〵和名の紙所コシフラトルとふゑのを仮押へ向海日
本へ對〳〵礼拝ふ之乃去新紙とゑて渡ゑ 正保 百十代
後光明院元甲申歳ゑ西二国浦新保村の者ども八十八人漂流

して朝せんより唐土ふねそして後朝せん同じ丁亥六月廿七日いつこう
ぶ浦へ来る二十六日長崎へ入津八月後帆せん同七月朝せん人
来聘ス九月二日古服大明ゑびそ大清紀元ス 慶安 二己丑琉
球人来朝 寛文 二癸巳同入貢同七月十七日唐船一そう長さ七
丈六尺町中尾長之弟へ来て旅宿ス宵へ松ゑ戻ス
同之甲午ノンカイ出船ス出船ス陽元和尚来朝長崎万屋町糸や
七郎右衛門方へ六七月比日あり 明暦 百十二代後西院元ス未
八月八日朝せん使光景同年ゑんの船ス出船ス来朝和尚七月

九日来朝ス下町ス津出ス右衛門方ス寓ス後渡海ス 寛同二丙申
遠州出船一艘長崎へ来る同之二月十六月冊山船ス出船ス
非和尚来朝ス宗福ちくわげくる 万治 元戊戌六月廿日国性爺
の使光船一そう入津人数百四十七人来ル月廿日後帆出船ス
同二己亥京宇の所の蘭陀人を国性爺追放ス取ひろうまて所蘭
陀船多く長崎へ迯来る此時女の蘭陀多く来る同之庚子月
本へ渡海の陳辰友こうの女の船を紅毛人波りに出むくて
為めつと奪ひとりけるゞ像ス逆風ス有ひ薩ヂのありきの浦へ

漂ひ流れて長崎へ送られる唐人い
ろは船あて後船に **寛文** 百十三代霊元院六丙午八月十二日ひのえん
陸人朝せんの地あて被船あげく被地ふ沒し八人小船ふみ又沒く、
乗る人残りて長崎へおくり来る事あぐ七人のこり居り対馬より
送り渡さる同十庚戌七月十八日朝夷てむく松おより沒をふ俵
てか勢あり十月廿日上下又十又人対馬へ送る弦む同年十二月
紀州の者船無人じゆく漂流同十一年癸酉月八丈ヶ島へ上陸又月
廿日伊豆下田へ送る同八月尾張の国船遠風ふあひ吳越へ漂流

義ろくげのふ船を作り十一人乗て長崎へ送る後船の上
尾張へ送り渡さる一人あふ紬の布子とふ紬ぐ長ぐ
同十一年癸酉琉球人朝代船り唐へ **延宝** 元癸酉月廿日
イギリス船長崎へ来るしまく七月廿八日後へ日こと船唐船
送りの船ふのり病船市方乗り乗人渡り沒同八庚申八月十七日向
ふ行長崎へ来る長崎へ乗人八人二人十八人送り来る長崎出発沒
九月廿日検義の門吳国人十二人病死の出家後ちに義沒九月十九日
吳こて船のくびふ船吳ろり捧六人の老ふ乗ふさる世和布子ふへの子息

白米二百石ヲフィンダ船ヨリジャガタラまで送る 天和 二壬戌
三月廿八日西の紫陀人宋ニ渡る 十一月琉球人来る 八月廿七日船せん
人来る 貞享 元甲子 西紫陀人宋ニ渡る 丑六月二百斛ばん船
シュラフハウテーボス 右五人江戸上ヲ乗て日本漂流人十二人送り来る 行勝
ヒニヤルキヤル 右五人熟非社村の五郎左衛門 八月十八日出船のり 勢船百十四人来る 山院
貞享四丁卯十一月六日紀伊国へ居る 宋船漂流船長サ十二ヲ死ル
ルスン人一人紀ヲ乗り送り来る 元禄 戊申 五月漂流船
ヨリ唐人二人送られ来る 十六人死ヲ云く 月六癸亥長崎

三人来る 八月遍死船 月本人七人来る 南年十月のころ
漂流し来りヒを普陀落ふ ふたけ迄送り来ると云く 廿九日
フタセンヨリ又日本人七人来る 宝永 百十五代中御門院七庚寅
十月十八日琉球人来る 正徳 元辛卯 船鮮人来聘 八月廿日甲午
唐船ふ伝牌一枚つ 五海此後 鮮八つ 戌一月十二月琉球人来朝
享保 四己亥 船鮮人来る 月十五己 紫所紫陀人来る 月十一丙午
紀府へ五百月十四己 交趾ヨリ象二疋渡る 七年と又七年ある 紫
西の紫陀人再び五百廿五卯 紫西の紫陀人来る 後文 百

十六代桜町院ヒ己未又月沼尾藩江戸屋敷の二人まつ三郎右衛門の
二人共ニ享保ヒ年壬人遠州流さを此さび十一年めまそ月ぜん
しそ八丈より送り来る歌上　上流亜へ百さを西乃わる　寛延
百十七代桃園院元式辰又月廿一日琉ぜん人来朝月十二月十四日琉
球人来聘月二己巳一ヶ年唐船十又そうと極るこ　宝暦　元年未
十二月癸未南部右京亮村松又帝和又人宰波より送来る
去年十月十七日出帆紀州藩流さとつの　明和　百十八代後桜町
院元甲申二月廿七日琉ぜん人来朝琉球後藤大坂おいて中友井天

[illegible]の船右衛門の船
十一月廿一日琉球人来聘月二乙酉十又月水戸藩へて来
村松左右衛門丈二十丈又月水戸藩へて来
帆奥右京亮小名浜より下総銚子沖へ漂流
漂流月二丙戌七月十六日南部村松
百廿代光格天皇九庚子又月房州
長廿世又月桜八月大島五ヶ廻
[illegible]漂流月村松長廿十七月紀州八月余州
[illegible]　安永

ゑんで 源重忠人数にて葉陀よりの船はとうしたあん 貞享
元亡月九月脈夷クナシリ蜂起
百余人を捕り浪速知行人
十二月二日脈蔵を責め賞に
流人十一人送り来る
十人天明八申の七月松前奉行
来る辰三月源忠
浦へ重松二てう源長一てう
帳校之本船中数百沢山大のごとく死りめと海中ゑのて
陸蝦夷地船ふ洲ゆうしあて
又くヲロシヤ船源忠ふつ紀伊
さる一名を莫斯哥未亜くのふ
去天明二壬寅十二月九月十八日吹上
去天明二壬寅十二月十二日
去天明ふあひ月二年七月廿日ヲロシヤ
ふ源忠一文ようカムサツカワツカあどいふ地
西の都へ出子モロとのふ地

の船所大船数十艘を造り
おんなかをて吹こく候間八月廿二日琉球人来朝十二月六日出船
同九丁巳十月十日浦上へ着候間十五日朝北方より千里程沖不審
船数艘漂流大船一艘
傷ましき風波にて
剣を奪ひ取り須佐浦十七日十七日
夕方より死去候間十一巳来九月廣船を送り来りの人
まを長町惣兵衛船所久保や儀兵衛川島川水を多次郎小浦村

多次郎去ぬる寅七月卯九月九日まで森表出帆
ふる長崎廿五日廿八日
して年の十二月長崎へ
宮波船所剣越川水を八十六人
長井廿八日
来月三癸丑十月巳日安藤
多へ九月二日西の上刻阿蘭陀
九人栄須源兵衛味方

玉辺のこと一人数に十四人紫のところ退く死去長崎へ送る 文化
元甲子九月六日夕の下刻浮世亜船沖へ来る二艘船一艘ハ魯西
亜船来ル紫沢レサノフト船頭クルーセンステルヒヨ人数八十余人
ト云く此度日本人送り来る仏蘭のりのり此老十二ヶ年
おろしヤ国へ漂流し此度つれ来る内二人宮二月廿六日琉球
人来聘同所紫陀人来朝同年丁卯正月十二日下総国銚子沖ヘ
漂流船十七日溪へ引入大清国の船唐人八十二人日本人
一人寧波船与郭度河行与船与王永安同揚州亭同年月廿三日

第服ようこ百里程小の方来服美地ヲトロフ島の内ナイホトという処
魯西亜船二艘ようこ長崎防禦作
分ようを各服美地へ渡ようこ南部蝦夷地へ来服美地一日もん
ようこ有程分ようを行ようこ有まこと強む弦蝦夷へ支くこ出ようびこと有る
月八幸来ル月船せん人対ようの国へ来船二月弦出役人出張ス月
八月天徳九家田屋二次帰船大ようん国へ漂流此度送来ル
己年十月八日江戸表出帆ようを見沖へ発見ようひ年の二月
廣土へ送七月長さ紀表へ送ル来る月十癸酉六月長崎へ到着

陀船入津此度象一ひき捕とる象又大きサ八尺又寸法
尾まで七尺人おの長さ二尺人後長さ二尺人又寸長ゆゑ
二尺又寸尾長サ四尺人又寸牙二尺人中世出処ベンガラと云くさ
山猫猿鹿鶴英名ケレツーン一羽茶梅鶴鶴日本へ象の渡
りてる世びあて二度あるよう此度唐船より長崎人
子七月廿五日唐船へ白帆の船一そう漂流唐船より長崎人
七人おのゝ上陸お尋ゆゑ云後也せ送方く能個ゝ海辺ふつる
ぎ近一年一疋打とる二疋うだひ死生番の人殺後炮打うけ

らうせきうすふ付鉄炮あて長人一人其国ハ処早く船へ逃攻
月十一日ふ退帆死ものゝ長崎年ふ付へ漂流人戻ゝ出帆の中イキリ
スゝ云く月八月唐船より清津戻の船士ふ人長崎へ送る定年
船が孫孫こく大ー女、女婆のせろ籍風ふ来唐年攻てこ

文化

百廿一代仁孝天皇十四丁丑所葉龍船長崎交代のカピタン妻子
乳母下女ゝ逃ゝる長病ふ付抱のゝ長逃ゝ死ねねが
ひーろど測ゆきゝて逃ゝ人ーあく月十月カピタン攻ゝの船ふ攻
さゝゝ云く

文政

文政宝月十四日ふ及海原ー出へ長ふ船ちく

浦賀へ来る人イギリス国王アメリカの内と云く同二己卯六月
浦賀川原村へ琉球人漂流水戸侯より浦賀へ出し渡す由後
同日辛巳六月阿蘭陀カメヲール二疋和名駱駝牡八牝八
七月十九日長サ二尺八寸耳ハ三寸ばかりそこの外
ゑまと脊ホ円長あり上ハ鞍のごとし江戸表へ出せり人世の
大らんだあり同月廿五日同月十六日より二月ハまで脂夷地大
きん同六癸未年阿正月十六日より二月ハまで脂夷地大地
廿八日及ひ多賀大津浜沖へ異国船来る退帆同七甲申年同月

月退帆イギリスのよう内ハ西成正月元日猟師のさうの下吉村
伊豆浦へ寄波船出る長サ十六間ほ人ハ人ハ人ハ七ケ年以前
新宮ようの船の長サ凡十間ほ人ハ人ハ人ハ
揚帆ハ柳揚剣ハ
抗冷の海中へ異形の七本流れ
峨眉山下奢と書ハ長サ一丈余又字の源形ハ
十二巳丑阿蘭陀商船ホ帰人と安ホ来ること再ユテヒレスホの妻
商年十九女人ハ

ウラヤユタン（長崎廿人源ちゆく）松ち屋（ちゆく）五郎二ぢん（ちゆく）まで（ちゆく）
五月三日辰九月ちゆく松屋（ちゆく）ちゆく（ちゆく）
ちゆく助ちゆく（ちゆく）廣（ちゆく）ちゆく送り（ちゆく）来る以上十四人去天保元寅年
ちゆく源流（ちゆく）外の一ぢん（ちゆく）ちゆく送り来る月十二月琉球人来朝月六日来
廣ぢん（ちゆく）ちゆく流（ちゆく）数ちゆく（ちゆく）ちゆく揚西亭（ちゆく）ちゆく
廣人ぢん（ちゆく）ちゆく朝ちゆく（ちゆく）ちゆく
安（ちゆく）房洲の（ちゆく）ちゆく（ちゆく）長崎ちゆく一ちゆく
アメリカ来ちゆく退帆月十二年丑尚敬廣ちゆくイギリスとちゆくこの

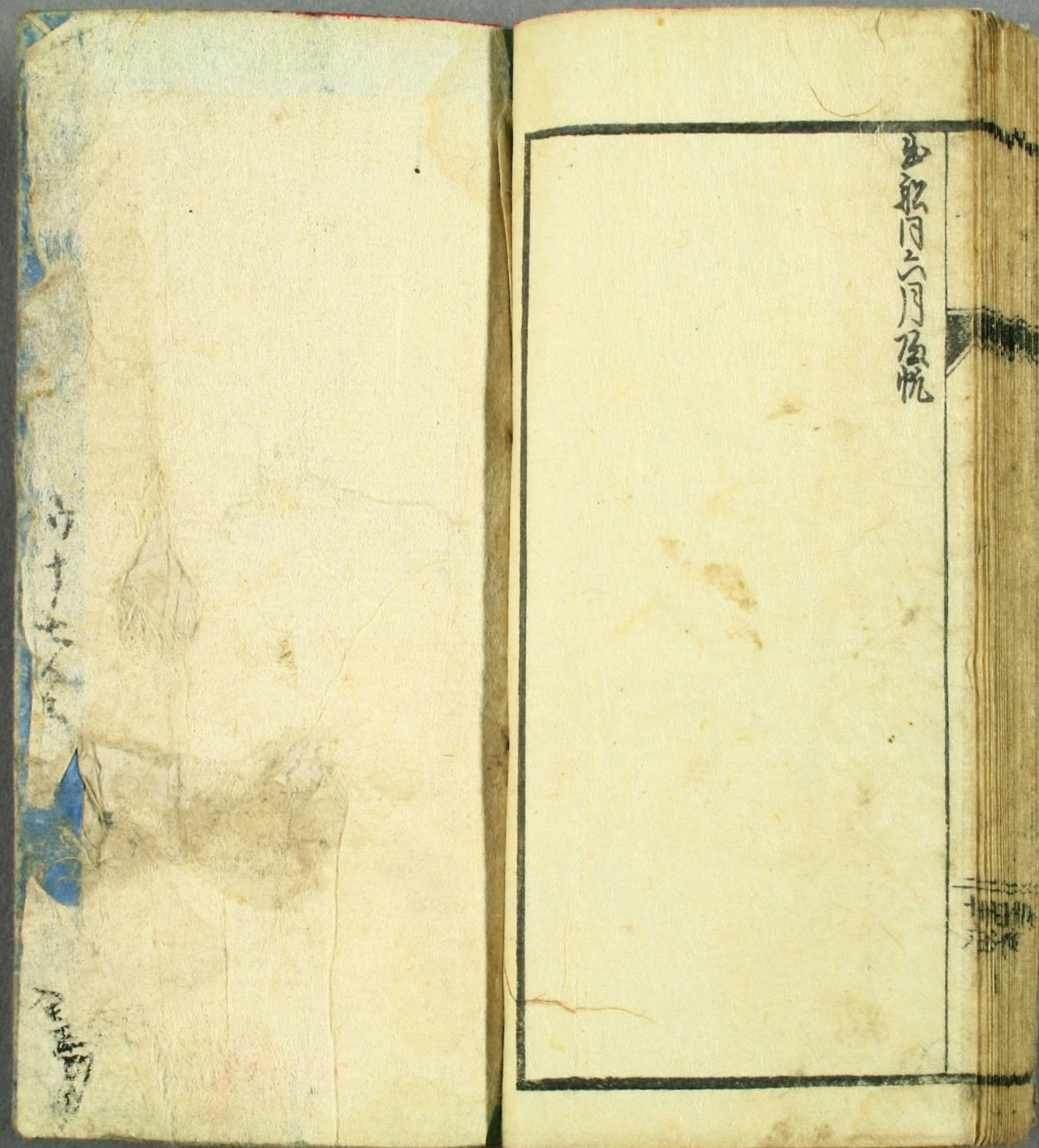
一ちゆく源流（ちゆく）月十二日長崎ちゆく廣ちゆく送ちゆく
西村ちゆく松屋ちゆく松浦ちゆく辰年九月
嘉永元年十月の十一月百五十人ちゆく
ちゆく同年長崎ちゆく浦ちゆく
ちゆく人ちゆく去ちゆくの九月出帆
土ちゆく十二月廿日長崎ちゆく長崎
十九月出　博多礼　元甲辰十月来朝琉球人来聘月
ちゆく廣ちゆく松一ちゆく九ちゆく
ちゆく稜ちゆく本帆ちゆく長ちゆく月浦ちゆく

中方の方へ退帆ス七月長崎へヲランダ軍船そなへめて海上に長ガ
二十七日中七日ハ大矣二隻部合七十二てう乗組二百廿六人とそ同
二月琉球へ帰帆ス常朝西洋船漂流人数二百二十人ばかりそ海上
長ゝ広屋敷船をハ下ル後行く退帆ス二月廿二日ハ二月十一日ハ沢浦
かぐらとへ小アメリカの内ヲウヨルといふ処の船一てう入港ス船長
サ十九日金中七日帆ハ上本帆九ツ波ハ高の波の中帆
那もや天神丸ハ長崎船奉行宝丸ハ二百五拾石船漂流人
十一人乗合ハ去夜十二月廿一日出帆洋中ハ暴風ハ

海上ハ海ハ百姓ハ行ハ沢らんとおりかとろ
のふ孫一てう渡船して乗ハ
けるとハ乗人ハ大勢ハ
及ハ船閉浦船答ハ
十一人乗合ハ正月十二日出帆
ぎを教ハ助命ハ
ハ乗人ハ二十二人浦賀ハ
一てう渡ハ八月退帆イキリス船のう屋敷ハ二丙午七月琉球へ

イギリス船一そう浦賀番所見廻り上下口ノ湾の間ルヘッス岸
ふ人上陸被船来る船のかし一日廿七日お浦賀港へ米アメリカの
うちバチトン船大小二そう浦賀沖江戸湾番所ゆ廻り六月七日
退帆バチトンヲウヨルク船ヒウテン六十三キ船の号ユリユンス長サ巾十
二尺半巾九尺二寸小船長サ二十二尺巾五尺六寸スリン石廿三代今上
皇帝弘化巳丁未二月廿一日浦賀沖江戸湾番所ゆ十町ほど
沖ふ来て船一そう飛来帆投こ十尺後数和泉守様お
浦賀番所ゆ差出さる乗人船長の沖ふ来て御用の義ゆ廿七日

ふ退帆江戸湾番所ゆ廻り西暦十月朔日ゆ
今廿九日ゆ薩摩ふ向ふ
あく一同歩船ゆ一ゆ一ラランス国の船と云く 嘉永六 癸丑 二月
廿日ゆ江戸湾番所ゆ浦賀沖ふ来て船二そう月日九ツ時ゆ
月沖ふ二ぞうれ元ぶん弘お番ゆ西暦廿二日退帆ゆ
乗組友ふの清兵ゆ西暦廿二日退帆ゆ
ふ来て船一そうれ元ぶん外の方ふ
向親江又城ゲ浦ゆ又黒船沖ふ

かゝるイギリス船長サ二十名大船十二そう人数百余人と云く十日午刻
出帆十二日下田港へかゝる十二日薩山ホ田原出張江川彦太郎
翌十七日卯中刻出帆辰巳の方へ乗出す十月二日成十二月
琉球人来て十九日出　常陸国日立浦湊へ亜メリカの内ハシントン船の名カリホルニヤより船と
仕て十日目あて蒲地へ長崎と云く蒸気船二そう軍船二そう
を引船長サ三十五六尺巾八九けん車さ一丈五尺ろ厚サ
三尺程国王より書を見上候日十九日琉球国の内那覇沖

へ来て〻船二そう外二そう大海船軍船合五そう渡来亜メリカ船
のよう海深度より出とゞけ内七月出さる船曹西亜船二そう渡
来を国王より書うんと見候内一そう被船と云く内月出帆夷
地クシユンコタンと云の処へ二五六づゝ仮の長くせん渡来乗人
百三十余人と云く蒲内より高て〻の風波大船の婦商無と綾一
大漂と合せんのよう又漂船ゞんと云く月七甲寅正月八日ろゞ
海ヨロシヤせん後帆月十日未上刻お浦賀湊へアメリカ船
追く入港以上八そう内蒸気船二そう月五月伊豆下田湊へ